

今までわが国でも容易に手にすることのできなかつた「紀程、路程」の書が、こうして活字本になって、我々の前に提供されたことは、本当に喜ばしい次第である。然し、同種の書として、内閣文庫には他にも明・陶承慶『新刻京本華夷風物商程一覽』二卷（明刊、劉氏喬山精舎）、『新鐫路程要覽』二卷（清刊）、清・陳其楫『天下路程』三卷（清乾隆六年刊）、清・頼盛遠『示我周行』三卷（清刊）等の諸書がある。私事にわたるが、三〇余年前、古典研究会が発足した当時、筆者はこれらの紀程、路程の書を複製することを長沢規矩也博士に提案したことがあった。長沢博士はこれらの諸書は俗書であるから、複製する必要はないとされ、結局複製は実現されなかつた。それから三〇余年を経た今日、楊正泰教授によって、その一部が活字本として刊行されたことは、筆者にとつてやはり嬉しいことである。

（一九九二年九月、山西人民出版社、太原、A五判、五一四頁）

南炳文著

南明史

山根 幸夫

南明史には、古くは謝国楨『南明史略』（上海人民出版社、一九五七）があり、更に A. Struve: The Southern Ming 1644-1662 (イェール大学出版部、一九八四) もあるが、今般、南炳文教授の『南明史』が刊行されたことはまことに喜ばしい次第である。南教授は、さきに湯綱教授（復旦大学）と共著で『明史』上・下（上海人民出版社、一九八五、九一）の大冊を出版したことは好く知られている。今般、その補篇として『南明史』を世に問われた。本書後記によれば、南教授は「本書はもと私と湯綱先生が合撰した『明史』（下）の一部分であったが、上海人民出版社の劉伯涵先生の鼓勵をうけ、これを摘出して改寫し、単行本として出版した」と述べられている。それ故、本書はもと『明史』（下）の最後の部分を構成していたが、それを分離して一冊の『南明史』としたものである。

本書は、明朝が李自成の農民軍によって亡ぼされた一六

四四年以降、永曆政権の滅亡、西山十三家軍、台湾の鄭氏政権が消滅するまでの時期を叙述している。その目次を紹介すれば、左の如くである。

引言

第一章 初期南明史

第一節 弘光政権

第二節 北京退出後の大順政権

第三節 張獻忠建立の大西政権

第二章 浙東、福建政権、農民軍の擁明抗清の開始

第一節 一六四五年下半年より四六年冬季に至る明清

鬪争形勢

第二節 江南・皖南地区の抗清鬪争

第三節 浙東魯王政権

第四節 隆武政権

第五節 江西・鄂・皖辺区の抗清鬪争と大順軍余部

第六節 弘光政権覆滅後の大西政権

第三章 永曆政権の建立

第一節 一六五一年以前の永曆政権

第二節 大西軍余部の雲南占拠及び秦王封爵の争い

第三節 閩浙沿海の魯監國政権と起兵初期の鄭成功

第四章 南明時期の終結

第一節 大西軍余部の失敗と永曆政権の滅亡

第二節 西山十三家——大順軍余部の最後段階

第三節 鄭成功の抗清継続と永曆年号堅持の台湾鄭氏

政権

第五章 南明時期の対外関係

結語・後記

まず「引言」の一部を紹介してみたい。「明朝中央政権が崇禎一七年三月に覆滅した指標は、李自成の率いる農民起義軍が北京城へ攻め入り、崇禎帝が自縊死亡したことである。この時、中国の政治勢力の主要なものには三大部分あり、その一は農民起義軍である。李自成領導の一支の外に、張獻忠領率の一支があった。当時、李自成軍は主として陝西・山西・河北・河南・山東・湖北等の省を控制し、張獻忠軍は崇禎一六年一二月の決定で、湖広より四川に西進することになり、正に戦略を実施する過程中にあり、川東一帯で活動していた。その二は、山海関外の東北地区を占拠していた、満州貴族を中核とする清朝。その三は、中国南方の各省を控制していた明朝の残余勢力。新しく興った清朝は雄心勃勃、一気に関内に進入し、中国全土を自己の管轄下に置こうと企図していたが、関内の政局変動の烈しさを見て、得がたいチャンスと認め、直ちに関内へ侵入しようとしていた。李自成軍は北京へ侵入した後、階級的局

限性や戦略上で犯した多くの錯誤により、清朝の関内打入に客観条件を提供していた。その上、明朝の山海関鎮守の將軍吳三桂が開闕して清軍を招き入れるという事件を通じて、清朝の関内打入計画を変更させ、歴史に大きな影響を与えた。四月下旬、李自成軍は山海関で吳三桂軍と多尔袞の率いる清軍に打破られ、同月末、北京城を退出した。

「清兵の入関と李自成軍の北京撤退後、全国の政治状況には甚大な変化が発生した——滿州貴族を中核とする清朝は、空前の積極的姿勢で国内の三大政治勢力間の闘争に介入し、明朝の残存勢力及び農民軍勢力を迅速に消滅せしめた。その他、清朝は民族差別と民族圧迫の新問題を関内の広大な漢族人民にもたらした。この変化は、三種の政治勢力の相互関係を、大きく改変せざるを得なくした。清朝と対立する二つの政治勢力は、清朝に亡ぼされる運命を迴避し、民族矛盾激化の新形勢に順応するため、彼此の嫌疑を放棄し、共同して清朝反対闘争を進行せざるを得なかった。この濃厚な民族闘争の色彩を帯びた農民軍と、明朝残存勢力との連合した反清戦線は、客観条件により、明朝残存勢力が、その中において指導的地位を占めた。明朝残存勢力は明朝宗室を中核とし、時局の推移に随って、相次いで若干の活動区域で幾つかの政権を建立したが、これらが所謂「南明政権」である。南明政権は多々明朝の腐朽した

作風を踏襲し、その上、帝と称する者は凡庸無能な者が多く、精勵治を図る者は少く、文臣武将も矛盾がかさなって相争い、人民に対する剝削は甚だ残酷であった。農民軍との抗清連合戦線は、清朝の入関後、相当長期にわたって形成されたが、彼らと農民軍は清軍によって重大な打撃を加えられた。且つ、彼らの間には相互に摩擦があり、抗清合作活動に大きく影響した。これらの要素が、南明各政権、及びこれと連合した農民軍も、最後にはすっかり清朝に打破られる結果になった。然し、南明政権とこれと合作した農民軍は、抗清闘争中民族と国家に対する『忠心耿耿、英勇抗敵、堅貞不渝』死を視ること帰するが如き人物が出現し、彼らの悲壮きわまりない事迹は、中華民族の圧迫反抗斗争史上に、光輝ある一頁を留めた」。

以上の如き、南教授の「引言」を読めば、著者が本書において叙述しようとしている処も、容易に理解できであろう。著者は史料として『明史』『国権』『実録』等をも利用しているが、大部分は『明季南略』を始めとする雑史の類である。これらの史料を丹念に利用して、抗清斗争の推移を実に忠実に、具体的に描き出している。この点では、著者『明史』に劣らぬすぐれた労作である。

筆者が本書の中で最も興味を抱いたのは、最後の第五章の「南明時期の対外関係」である。全体から見れば、最も

短い章であるが、南明各政權と日本、東南アジア各国、および東アジアに進出した西欧植民地主義国家との頻繁な交往ぶりが描き出されている。

最初に「日本乞師」に論及している。明末清初の日本乞師については、戦争末期のことになるが石原道博氏の労作もある。著者は石原氏の著書は利用せず、専ら木宮泰彦『日華文化交流史』に依拠されたようであるが、これは片手落ちと言わねばならぬ。先ず、日本乞師の重要人物として周鶴芝を挙げている。結局、周鶴芝の乞師は要領を得ないまま終った。次は、鄭芝龍および鄭成功の父子である。一六四六年、隆武帝を擁する鄭芝竜は陳必勝、黄微蘭の二人を長崎へ派して、徳川將軍等へ八通の信書を送った。徳川幕府では事態を重視して、論議をかさねたが、結局出兵しないことに決定した。幕府では長崎に人を派して、その決定を鄭の使節に伝達しようとしたが、偶々隆武政權は覆滅し、鄭芝竜は清に降伏したとの消息が伝わったので、長崎へ人を派するのを中止にした。

鄭成功の最初の乞師は一六四八年であったが、幕府はその救援を拒絶した。この点については、徐恭生「試論鄭氏と日本の貿易関係」(『中日関係史論文集』黒竜江人民出版社、一九八四)の研究がある。一六五八年、鄭成功は再度使節を派して乞師したが、これも不発に終った。最後は一

六六〇年、兵官張光啓を派して、借兵を乞うたが、奏効しなかった。また馮京第は、日本乞師の著名人物の一人である。一六四七年、彼は安昌王朱恭棖、黄孝卿と共に長崎へ赴き乞師した。当時、長崎ではポルトガル船二隻が来航して、通商を求めるといふ騒動が起つていたので、乞師は報いられなかった。一六四九年一月、彼の第二次乞師が行われたが、この時同行者の中に黄宗羲もいたと云う。今回の乞師は、魯監国が湛微という僧に騙された為であった。湛微は普陀山の慈聖李太后所賜の藏経を日本へ贈れば、日本も必ず出兵してくれると欺むいたので、使節派遣となつたわけだが、湛微が関わっていることが判明して失敗したと云う。以上の如く、繰返し南明側は日本乞師を試みたが、結局いずれも失敗した事情を述べている。

第二に「遺民東渡」について述べる。日本へ亡命した遺民の中で、最も有名なのは朱舜水と戴笠である。朱舜水は日本でも著名な人物である。彼は清軍が江南に到達した後、浙聞海岸、日本、交趾、暹羅等の地に奔走して抗清を謀った。一六五九年、鄭成功軍の長江進攻戦にも従軍したが、失敗の後「時勢の已に去つた」ことを熟察して、日本に亡命することに決し、初め長崎に住んだが、水戸藩主徳川光圀に招聘されて江戸に移居した。朱舜水が日本思想界に与えた影響は、主として三方面で「旧唯物主義世界観、

教育思想、および歴史観」としている。朱舜水の歴史観は「水戸学」に影響し、それは『大日本史』の編纂にも反映したと云う。戴笠（原名は觀胤、明滅亡後、笠と改名）は、初め医に従事し、警隠詩社に加入して、顧亭林等との交流もあつた由である。一六五三年、清朝の民族圧迫に耐えきれず、日本へ亡命した。初め長崎に住む同郷の医師陳入徳の家に僑居したが、間もなく隠元禪師の門下に入つて出家し、名も性易と改め、独立禪師と号した。彼は痘疹の治療にすぐれ、「神医」と称され、その著に『痘科鍵』等の書もあつた。池田正直は彼に医術を学んで、名医になつたと云う。南教授は、南明の東渡遣民として、以上の二名のみしか挙げていないが、その他にも隠元禪師を始め、多数の遣民が東渡したことは有名な事実である。

第三には、鄭成功父子の海外貿易について述べている。南明政権の下で、海外貿易で最大の成績を挙げたのは鄭父子であり、殊に一六五〇年、鄭成功が厦門を取つてからは、その対外貿易は空前の発達を遂げた。彼は対外貿易を運営するため、「山五商」と「海五商」を設け、大陸の物資を海外に販運したと云う。鄭成功の死後、後継者鄭経も対外貿易を重視し、台湾から駆逐したオランダ商人とも相互友好条約を結んで、彼らに台湾に商館を置くことを許し、貿易関係を発展させた。鄭成功の在世時に交渉のあつ

た国々は、日本、フリッピン、インドネシア、越南、カンボジア、泰等に及んだと云う。その当時、鄭氏の海外貿易額は毎年銀三九二一四五六万両にのぼり、純益も二三四一二六九万両に達したと云う。鄭成功はこの海外貿易の利益で、その抗清斗争を支えたのであつた。清人郁永河は「成功、海外彈丸の地を以て、兵十餘万を養ひ、……財用匱しからざるは、通洋の利あるを以てなり」と述べていると云う。但し、鄭成功父子の行なつた海外貿易中、最も主要な対象は日本であつた、と指摘している。その原因の第一は、東南アジア貿易が漸次衰落したことであり、第二は、鄭氏一族は日本と特殊な歴史関係を有していたからだといふ。対日貿易は専ら長崎で集中的に行われた。鄭成功の時期、日本向け商品は、生糸・絹織物の他に、薬材・古書画等があつた。鄭経の時期になると、海禁が厳行されたため、大陸産出の生糸・絹織物等が不足し、台湾産の砂糖、鹿皮等が輸出された。他方、日本から輸入した商品には、金、銀、銅があり、その他、各種の武器類も相当額に達したと云う。鄭成功が毎年日本へ送つた商船は約四〇艘で、毎年貿易総額は銀二一六万両に達した、と述べている。更に、鄭経の時期には、英国東印度会社とも貿易関係を結び、一六七二年一〇月には、通商条約を締結している。然し、対英貿易が余り発展しなかつた理由として、オランダ

による妨害、清朝の海禁策と日本の鎖国、そして鄭氏政權が若干の商品については厳しい統制を加え、英人の利益を妨害したと云う三点を挙げてゐる。

第四に南明政權と西洋宣教師との關係を論じてゐる。明末、天主教の宣教師は積極的に皇族、太監、政府高官より地方官吏に至るまで伝道を試みたが、弘光、隆武、永曆政權と関わりをもつた名高い宣教師に畢方濟（サンピアソ、耶蘇念）があり、南明諸帝の信任を受け、太監龐天寿の保護によつて、広州に教会堂を建てたと云う。又、永曆政權の下で、瞿紗微（又は瞿安德、アンドレ・ザビエル、耶蘇念）、卜弥格（ホイム、耶蘇念）の兩人は帝室から深く信頼されたと云う。瞿紗微は永曆帝の嫡母王太后、生母馬太后、皇后王氏等に洗礼を施したが、一六五一年、永曆帝が広西より貴州に逃れる際落伍して、清軍により殺害された。卜弥格が王太后の旨を受けて羅馬教皇の処へ赴いたことは、よく知られてゐる。最後に、鄭成功父子が天主教に頗る好意を示し、殊に宣教師利崎（又は李科羅、S・リッチ、ドミニコ念）が信頼を受けていたことを述べてゐる。以上、第五章の内容について、少々詳細に紹介したが、著者にとつては、本章は中心ではなく、付加的な部分であることは、筆者もよく承知してゐる。但し、南明時期の對外關係がこの様に系統的に述べられた前例がないので、

敢て紹介を試みた次第である。但し、著者が、鄭氏政權と日本との關係、或いは日本乞師の問題に論及する際、従來の日本人の研究を殆ど参照せず、専ら木宮泰彦の著書に依拠してゐることは、些か残念である。

然し、何と言つても本書は南明諸政權と、これに連合した農民軍による抗清闘争を主題としてゐる。第一章では、南京に成立した弘光政權の覆滅に至るまでを述べると共に、大順政權の北京脱出より、九宮山における李自成の死亡までの推移、及び張獻忠の四川占領と大西政權建立の経過を述べてゐる。第二章では、先ず一六四五年後半より一六四六年冬季に至る間の明清闘争の形勢を概述すると共に、江南、皖南における抗清闘争の状況を具体的に述べてゐる。即ち、江南については、呉易（字は日生）、陳明遇、閻応元、沈猶竜、侯峒曾、黃淳耀等の抗清斗争を紹介する。皖南地区についても、金声（字は正希）、江天一、温璜、邱祖徳、尹民興、呉應箕等の抗清闘争の実情を述べてゐる。続いて、浙東における魯監國政權および隆武政權の興亡につづけて、江西・鄂・皖辺区における抗清斗争、並びに大順軍の余部が南明政權を擁して、抗清闘争に加わつたことを指摘する。一方、四川を占領した大西政權が、張獻忠の残酷な殺戮政策によつて、政治基盤を保持できず、成都を脱出して川北へ走り、結局張は清軍と戦つて死亡し

た事実を伝えている。

第三章は「永曆政権の建立」で、先ず一六五一年以前の永曆政権の推移について述べる。次いで紹武政権との衝突にふれた後、大順政権の余部郝永忠軍が、桂林地区において南明部隊と共同作戦を行ない、抗清闘争を展開したことに論及している。更に、大西軍余部が雲南を占拠し、孫可望、李定国等がこれを領導していた。即ち、大西軍も擁明政策を採ることになったが、孫、李は内部で烈しく指導権争いを展開した。続いて、浙閩沿海地区における魯監国政権の活動と、鄭成功の初期の抗清闘争について述べる。

第四章では「南明時期の終結」を叙述している。先ず、大西軍余部（孫、李等）と清軍との戦闘は、結局、孫・李の内部分裂によって敗北、李定国は永曆帝を奉じて雲南に入った。孫可望は叛変して清軍に投降、遂に清軍は雲南、貴州に侵入して、永曆帝は緬甸へ逃亡する他なかった。斯くて、永曆政権は覆滅し、李定国は最後まで忠誠を尽して死亡した。その他、大順軍の余部「西山十三家」は、川楚交界に拠って清軍に抵抗し、永曆政権の覆滅後も戦斗を継続した。最後に、鄭成功は依然として抗清闘争を展開し、台湾に鄭氏政権を樹立し、三代にわたって永曆の年号を保持した。

以上、南教授は第一章から第四章まで、南明各政権の興

亡の推移を辿ると共に、これに協力した大順軍、大西軍余部の抗清闘争を、詳細に描き出している。著者は基本的な史料はもとより、地方志や雑史の類まで丹念に検索して、南明史としては、これ以上詳細なものはない通史を書き上げていく。全巻を通じて読みとれることは、中国へ侵入してきた満州民族（清朝）と、これに烈しく抵抗する漢民族の悲壮な戦いぶりである。著者はこのような激烈な民族闘争に、深く感情を動かされたのではなからうか。著者の民族主義的な熱情が、本書の基調になっているように思われる。中国人でなければ書けない南明史と云うことができよう。今後、南明の歴史を考察する場合には、まず第一に参考しなければならぬ著書である。

最後に、一言付け加えておきたい。現在、中国人の著書には殆ど索引がない。本書のように、多数の人名、地名が出てくる場合、読者にとっては、索引があるとどれだけ便利になるか知れない、本書に限ったわけではないが、今後は中国の学術書には、何とか索引を付ける努力をして頂きたい。中国の研究者および出版社に強く要望する次第である。

（一九九二年一月、南開大学出版社、A五判、三八〇頁）

註

- (1) ストループ女史の『南明史』については、『明代史研究』一三号で紹介したが、上海古籍出版社より海外漢学叢書の一冊として漢訳本が刊行されている。
- (2) 石原道博、『明末清初日本乞師の研究』（富山房、一九四五）には、それ迄に石原氏が執筆した日本乞師に関する諸論文を取録している。
- (3) 周鶴芝、馮京第の日本乞師については、石原道博「明將周鶴芝、馮京第の日本乞師に就いて」（斎藤先生古稀祝賀記念論文集一九三七）がある。
- (4) この際の日本乞師に対する日本側の対応を検討したものに、小宮木代良「明末清初日本乞師に対する家光政権の対応——正保三年一月十二日付板倉重宗書状の検討を中心として」（九州史学九七、一九九〇）がある。
- (5) 黄宗羲については、吳光「黄梨洲、乞師日本」史実考（『文学論輯三三三、一九八七』）がある。
- (6) この点について、藤沢誠「朱舜水の古学思想と我が国古学派との関係」（東京支那学会報一二、一九六六）もある。
- (7) 木宮泰彦の著書は、胡錫年訳『中日文化交流史』（商務印書館、一九八〇）として、中国語に翻訳されている。

グンナー・ヤーリング著
カシユガルからの印刷物

新免 康

二〇世紀前半の東トルキスタン史に関しては、最近になってようやく、政治的状況などを扱った研究が出現しつつある。ただ、これらの研究においては、当該時期に当地域のトルコ系住民自身によって書かれた一次史料の利用が、決定的に欠落していると言つてよい。しかし、実際は、一九一〇〜三〇年代に、トルコ系住民による文献も含む相当量の印刷物が、当時カシユガルに拠点を築いていたスウェーデン伝道団の印刷所で印刷され、配布されていた。しかもこれらの文献のかなりの部分が、スウェーデンに現存する。そのことを明らかにしたのが、ここで取り上げる『カシユガルからの印刷物』である。

本書の著者ヤーリング氏（一九〇七年〜）は、ソ連大使などを歴任したスウェーデンの著名な外交官である。学生時代の専攻が東トルキスタンの研究であった氏は、一九二九〜一九三〇年にカシユガルなどに調査旅行に赴いた際